

日韓古代窯跡調査の動向

The Trends in the Research about Ancient Kilns in Japan and South Korea

植野 浩三*

Koso Ueno

はじめに

韓国の窯跡資料の調査・研究は、韓国の土器編年や生産体制、流通論等の言及はもちろんのこと、窯で焼成された瓦質土器と陶質土器の存在から、窯構造と焼成技術の変革や推移を検討するためにも重要である。また、日本に直接的影響を与えた製陶技術という面からも、初現期の須恵器や窯の系譜、そしてその後の影響の有無を考える場合、不可欠なものといえる。

小稿は、上記の観点から韓国における窯跡調査の基礎資料を集成して、現段階での日韓の調査や研究動向をまとめることを目的とする。ここでは、日本の初期須恵器段階の一部と、韓国の三国時代以前の土器窯跡資料を中心に整理する。

I 日本の初期須恵器窯跡

(1) 窯跡の特徴

日本の窯跡は、既に筆者を含めてかなり整理されている(植野1993、1999a・b)。その初現は神戸市出合遺跡の窯跡であるが、これは3～4世紀段階の突発的なものである。須恵器と呼ばれる通有のものは、5世紀代に入って北部九州、瀬戸内沿岸、近畿地方に成立し、ついで東海・東北地方に拡散して成立し、現在約20ヶ所を数える。北部九州地域では、福岡県朝倉窯跡群(3ヶ所)、隈・西小田窯跡群(3ヶ所)、居屋敷窯跡と新開窯跡であり、瀬戸内地域では岡山県奥ヶ谷窯跡、愛媛県市場南組窯跡、香川県三郎池西岸窯跡、官山窯跡である。近畿地方では大阪府陶邑古窯址群を筆頭として、吹田窯跡群(2ヶ所)、一須賀2号窯跡がある。東海地方では愛知県東山窯跡群(2ヶ所)、東北地方では宮城県大蓮寺窯跡、金山窯跡が確認できる。その他、5世紀後半代の窯跡はかなり増加する。日本における生産の始まりと展開については、既に明らかにしたとおりであり(植野1999a)、5世紀代には初現期を経て、以降大きく2回の拡散によって全国的に窯が成立していく。

表1は、こうした初期須恵器窯跡なかでも規模・構造が分かるものをあげた。各窯跡によって残存状況が異なるため、全てを網羅できないが、規模の面において大小の差があることが第一に上げられる。窯の全長において10mを越えるものは、TK73号窯の段階から認められ、それ以前は一須賀2号窯跡の9mを最大にして、それ未満が多い。その焼成部の幅についても、三郎池西岸窯跡や一須賀2号窯跡のような例外もあるが、TK73号窯の段階を境にして2mを越えるものが増えていく。TK73型式の初段階と考えられる濁り池窯跡は、全長は8.5m、最大幅1.9mとTK73号窯より小振りであり(図1-1)、初現期の小規模傾向と合致する。

平面と立面形態においても差違がある。初現期のものはいずれも直線的であり、TK73号窯段階では曲線的になる。窯の構造が基本的に異なることを示唆している。さらに煙出し形態においても、初現期のものは煙突形を呈し、以降のものは焼成部と一体となって立ち上がり、それに伴って焼成室後端部は屈曲するものと曲線で連なるものに区別できる。

そうした特徴を整理したのが表2である。初現期のものを「直線型」、TK73号窯以降のものを「曲線型」と仮に呼称した。その他、窯体の傾斜角度等のいくつかの要素が存在するが、両者が明確に区別できるものは上記の項目である。

(2) 窯構造の新旧

初期須恵器段階の窯は細部の差違は存在するものの、おおむね表2のような「直線型」と「曲線型」の類型に分けることが可能である。時期的には、「直線型」はTG232型式段階に該当し、直接的に朝鮮半島から技術が導入され、最も早く生産を開始した窯がほぼこれに該当している。従って、日本における須恵器生産の開始期(TG232型式段階)には、直線的で小型の窯が一般的に築かれた可能性が強い。

また「曲線型」は、最古のTG232型式の次段階であるTK73型式に認められるようになり、それ以降古墳時代を通して一般的な形態となっていく。「曲線型」は、規模の拡大のみならずその形態、そしてそれに伴う窯の構築技術や焼成技術の改良に支えられて、大量生産を可能にしたのである。

これらの二者は、時期的な違いとして存在する。「曲線型」成立の要因としては、試行錯誤による技術的な改良と考えることもできるし、一方では新たな技術の渡来によって一気に変化したとすることもできる。いずれかの要因は決めがたいし、現在のところその有力な根拠もない。少なくとも初現期以降、生産は陶邑窯を中心として継続していたことだけは事実である。

最近の遺物研究では、TK73型式はいったて日本化した製品を生産していることが分かってきた(植野2002)。初現期の多種多様な製品を取捨選択して、一定の器種に整えたのがTK73型式段階であり、ここに大きな格差を認めることができる。それ以降TK208型式段階の定型化をもってほぼ完成を見るが、その原型はTK73型式段階にほぼ準備されていたと考えられる。こうした遺物研究の成果と小稿で整理した窯体構造の変革は、非常によく合致している。これは偶然とは考えにくく、TK73型式前後の段階に相当の技術改良やあるいは選択等が存在し、実際に施行されたことは、充分考えられるところである。TK73型式段階の窯は、初現期比べて減少し、全国的に陶邑窯に限定できる様相を示している。こうした生産の限定と改良・改革が

表1 日本初期須恵器窯跡の各部数値（植野1999bに追加修正）

単位m

窯跡名	時期	全長 ()は現存長		焚口～焼 成部長さ	焚口幅	焼成部 幅	焼成部 角度	横断面 形	床枚数	煙出し 長	備考
		水平距離	斜距離								
出合窯跡	3, 4 C					1.2	10	凹			
小腰1号窯	TG232					1.76		凹			
小腰2号窯	TG232					1.5		凹	有		
山隈1号窯	TG232					1.7		U	2		
居屋敷窯	TG232	6	約6.8	約5.6	1	1.2	25	凹		1.0	
奥ヶ谷窯	TG232					1.22	20	U	2		上部に排水溝
三郎池西岸窯	TG232	(5)				2.15	15	凹	0		柱穴有り
吹田32号窯	TG232	(3.58)	(4.05)			1.48	20	凹		1.2	
一須賀2号窯	TG232	9	約9.75	約8	L3	2	20	凹	数回	1.75	
隈・西小田No.10 2号窯	TK73					1.9	21	凹			
隈・西小田No.10 3号窯	TK73					2	19	凹			
濁り池窯	TK73	8.5	約9.8	約9.8	L0.8	1.9	20	凹	2~3		上部に排水溝
TK73号窯	TK73	11.4	約11.8	約10.9	0.9	2.4	19	凹	5		天井貼り壁10枚
TK85号窯	TK73	10.6	約11.6	約11.6	1.4	2.6	27	凹	2~3		
TK87号窯	TK73	10.1	約11	約9.6	0.7	2.4	18	凹	2		上部に排水溝
城山2号窯	ON46	7.5	約8	約8	0.9	1.3	30	凹	2		
大蓮寺窯	ON46	(4)				1.65	8	凹	0		

表2 日本初期須恵器窯跡の分類と特徴（植野1999bに追加修正）

	窯体平面形	燃焼部・焼成部 規模	主軸立面 形態	焼成部後 端部形態	煙出し 形態	該当窯跡
直線型	直線的、 寸胴	小型、 長さ8m未満 幅2m未満	直線的傾斜	屈曲して 立上がる	煙突形	居屋敷窯跡、奥ヶ谷窯跡、 吹田32号窯跡、一須賀2号窯 跡、(三郎池西岸窯跡)
曲線型	曲線的、 焼成部膨らむ	大型、 長さ10m以上 幅2.4~2.6m	曲線的傾斜	曲線で連 なる	一体形	濁り池窯跡、 TK73・TK85・TK87号窯跡

軌を一にしている可能性も存在する。

しかし、問題の窯体構造の変化は、これが外的あるいは内的要因であるのかは、即断できない。実際の変化とその原因を繋げる根拠には、上記したような大きく2つの選択肢が考えられるが、積極的な根拠に乏しいのである。むしろこうした検討は小稿の主題であり、次章で述べ

る韓国の窯跡の整理と把握によって比較・検討し、その関係を導き出す必要があるし、今後の日韓の窯跡資料の増加と検討をもって論じていくことが重要であろう。

I 韓国の窯跡調査

(1) 窯跡調査の動向 (図1～4)

韓国の窯跡調査はほぼ1970年代の瓦窯の調査から始まり、単発あるいは複数の瓦窯が明らかになっていった。土器窯はほぼ1980年代から単発的に調査が実施されてきた。全羅北道雲谷里窯跡(全1988)、同新龍里窯跡(全1988)がその初期にあたり、その後全羅南道大谷里窯跡(崔夢龍・他1988)、同鳩林里窯跡群(梨花女子大学校博物館1988)、そして忠清北道鎮川三龍里・山水里窯跡群が調査され(崔秉鉉1988)、主に百済地域の窯跡調査が相次いで報告された。こうした中で、新羅窯跡の全体的な動向を検討する方向性も見られたり、新羅・伽耶窯跡の総合的な把握も精力的に実施されているが(李殷昌1982)、調査については単発的なものが多い。なかでも三龍里・山水里窯跡群の調査は、高速道路建設に伴う事前調査ということもあり、それまで単発的であった調査から広範囲にまたがる20基の窯を調査した。こうした成果は、窯の群構成の検討に迫るもので、韓国における窯跡の捉え方や調査方法の検討面から一つの転機になったものといえよう。

1990年代になると、総合的な調査が行われるようになり多くの成果を上げている。1991年には、慶尚南道余草里窯跡群が学術調査され、同地区に数基分布する窯のうち2基の窯が発掘調査された(金正完・權相烈他1992、權相烈1995)。調査精度や記録面においてかなり充実した内容といえる。1995年には、慶尚北道慶州市郊外において競馬場建設が計画され、広範囲の試掘調査がなされ、2000年までの間に広域の発掘調査が実施された。この孫谷洞窯跡群では、総数50基を越える窯が確認され、総合的な調査が実施された。後述するように多種の遺構が検出され、生産遺跡として総合的に検討する資料が得られた(李相俊1998、2000、2001)。

1996年から1997年には、慶尚南道金海市陵洞遺跡において2基の窯が調査された(釜山大学校・蔚山大学校1997)。また、2000年から最近にかけて、慶尚北道大邱市慶山玉山洞遺跡において33基にのぼる窯跡が調査された。広範囲調査によって、窯本体以外にも付属施設や墳墓等の実体が明らかになってきたし、同窯では既に周辺地域出土品との関連性が指摘されている(嶺南文化財研究院2001)。

以上が代表的な窯跡調査の概要である。その他、青銅器時代から原三国時代にかけての土器焼成遺構の調査も散発的に実施されているが、小稿では省略する。このように韓国では、1980年代後半から主に開発に伴う調査が急増し、それに伴う大規模調査によって窯跡が確認され、調査されたものが多い。これは、日本でも同様であるが、こうした調査によって調査精度や方法が検討され、生産遺跡に対する様々な問題意識が生まれてきた。

しかし韓国においては、時期的また地域的に見ても窯跡の調査例は微量といえる。これまでの調査例は全体の極一部なのである。しかし後述するように、各地域において窯の調査が進んで

植野：日韓古代窯跡調査の動向

表3 韓国窯跡の各部数値 (引用文献より作成) 単位m

窯跡名	時期	全長 ()は現存	焚口幅	焼成部 最大幅	焼成部 角度	横断面形	床枚数	備考
大谷里36号窯跡	3~4	6.3	3.7	約1.3	約12	凹		燃焼部拡大
三龍里88-1号窯跡	3	5.4		1.3	13	凹		崔Ⅰ期群
三龍里88-2号窯跡		4		1.5	13	凹		崔Ⅰ期群
三龍里89-1号窯跡		4.2		1.5	10			崔Ⅰ期群
三龍里89-2号窯跡		5.7~		1.9	20	凹		崔Ⅱ期群
三龍里90-1号窯跡		6.25		2.2	23			崔Ⅲ期群
三龍里90-2号窯跡		2.35~		1.6	17			崔Ⅲ期群
三龍里90-3号窯跡		5.2~		1.55	22			崔Ⅲ期群
三龍里90-4号窯跡		7.9		2.5	16			崔Ⅲ期群
三龍里90-5号窯跡		7.9		2.6	15			崔Ⅲ期群
三龍里90-6号窯跡		(5.4)		2.1	16			崔Ⅲ期群
山水里87-1号窯跡	4C後	5.9~		3.0	17	凹		崔Ⅳ期群
山水里87-5号窯跡	4~5	6.78		2.9	25			崔Ⅴ期群
山水里87-6号窯跡	4~5	7.9		3.45	23			崔Ⅴ期群
山水里87-7号窯跡		7.7		2.95	16	凹		崔Ⅴ期群
山水里87-8号窯跡		7.4		2.9	17	凹		崔Ⅴ期群
山水里87-1号窯跡		2.4		1.5	16			崔Ⅵ期群
山水里87-2号窯跡		3.05		2.1	30			崔Ⅵ期群
山水里87-3号窯跡		2.4		1.8	17			崔Ⅵ期群
山水里87-4号窯跡		3.6		1.6	24	U		崔Ⅵ期群
余草里A地区窯跡	4C後	13		1.6	18	凹	数回~	
余草里B地区窯跡	4C後	12.2		1.9	11	U		
陵洞1号窯跡	5C中	5.3		1.5	20			
菴谷洞47号窯跡	5C中	7.1		1.6	17	凹		A型
菴谷洞8号窯跡	〃	6.84		1.34	13	凹		B1型
菴谷洞26号窯跡	〃	5.7		1.2	14	U		B1型
菴谷洞22号窯跡		6.2		1.1	20	凹		B2型
菴谷洞31号窯跡		(5.0)		1.25	18	凹		B2型
菴谷洞18号窯跡	6C	(4.5)		1.7	14	U		B3型
菴谷洞19号窯跡		(3.3)		1.9	20	凹		B3型
菴谷洞21号窯跡		(2.7)		2.1	20	凹		B3型
菴谷洞32号窯跡	6C~	(5.3)		1.65	19	凹		B4型
菴谷洞34号窯跡		(5.2)		1.75	15	凹		B4型
雲谷里窯跡	6C?	6×4			10	凹		方形形状態
新龍里1号窯跡	6C	8.5	1.6	3.0	20	凹		曲線の形態
新龍里2号窯跡	6C	11.0	1.8	3.2	20	凹	13枚	曲線の形態
鳩林里西4区窯跡		5~		約2.5	20~25?			統一新羅時代か
鳩林里西7区窯跡		約7		2.2	20~25?	U		統一新羅時代か

きたことによって、遺物や窯の分類はもちろんのこと、生産遺跡としてとらえること、流通関係やその組織等、様々な考察が可能になってきたといえる。

(2) 窯跡調査の成果

窯跡調査では、多くの成果や途中経過が報告されている。その代表的なものを紹介しておこう。1980年代では李殷昌の成果を上げないわけにはいかない。新羅・伽耶土器の代表的な窯跡の分布調査をもとに、窯の実体や性格について整理し、編年・生産・文化圏・系譜等にも言及し、総合的な検討を試みている。発掘調査には至っていないが、極めて基礎的な精力的な研究であり、窯跡研究の起点として評価されなければならない(李殷昌1982)。

三籠里・山水里窯跡群の調査は、広域にまたがる複数の窯を調査したこともあり、多くの指摘がなされている。ここでは当初、2群に分かれて13基に窯が調査され、三籠里では5基、山水里では8基の窯が調査され、最終的に計20基の窯跡が調査された。そして、近隣には6基の住居址が検出されている。これらの窯跡は遺物・遺構によって6期群に分けられ、それぞれ各期の窯の規模についても言及している。操業の開始期や所属時期については諸説が存在するが、崔秉鉉は近年、遅くとも3世紀以前に開始し、5世紀代まで継続することは比定できないとしている。三籠里・山水里窯跡群の調査は、土器編年や窯構造の推移が追えるのみならず、含まれている土器が軟質土器からいわゆる瓦質土器そして陶質土器である点が重要である。瓦質から陶質土器への推移は一律ではなく、これが窯構造との関係でどう結びつけられるかを探る非常に良好な資料であり、韓国の土器研究において貴重な資料といえる。

余草里窯跡群は金海陵洞遺跡とともに、伽耶地方で数少ない調査資料といえる。国立晋州博物館によって学術調査された。精度の高い記録が報告されている点や、科学分析が取り入れられている点、そして日本との関係を知る4世紀後半代の資料である点も重要である。後述するが、同窯跡は窯体の最大幅が1.6m程度を非常に狭く、日本の初現期の「直線型」としたものと共通するため、日韓の窯の系譜を探る大きな鍵を握っている。

蓀谷洞窯跡群は5世紀中葉から7世紀代にかけての総数50余基の窯が確認されており、なかでもA地区では47基の窯が存在している。この地域は前後の時代の土器窯跡や瓦窯が密集する地域であり、いわば宮都とその周辺部の窯業生産を一手に担った場所であることから、その成果は多岐にわたる。窯構造については、すでに4群の分類がされ、土器編年や消費地との関係の検討も進んでいる。そして蓀谷洞窯跡群は、生産遺跡としての窯・工房・採土場の他、工人の墓、住居等が包括された複合遺跡として把握でき、これまでの単体の窯調査から複合的な総合的な検討と把握が可能になった。その一端は李相俊がまとめているとおりであり(李相俊1998、2000、2001)、窯業集団の性格と当時の社会組織についての検討も進みつつある。

大邱市慶山玉山洞遺跡でも33基にのぼる5～7世紀にわたる窯跡が調査された。ここでは既に同時代の近隣の集落・墳墓遺跡の出土品が同窯跡の製品であるとの指摘がなされており、生産と供給あるいは当時の社会状況の復元研究が試みられている。金海陵洞遺跡においても、生産と供給関係の検討が指摘されており、今後の成果が期待される。

以上のように韓国での窯跡の調査は、大規模な調査を含みながらも、多くの成果を上げてい

る。これまで未解決だった生産遺跡の把握や、供給関係等の具体的な検討を可能にする貴重な資料が蓄積されている。特に生産地と供給地との関係は今後より具体化されるであろうし、生産遺跡の具体像も明確になろう。各窯跡群の検討によって、いくつかのモデルが作られ、各地域に即した検討が取り組まれるはずである。

おわりに

日本の初期須恵器段階の窯跡、そして韓国の窯跡調査の動向と成果を簡単に整理してきた。冒頭で述べた日本の初期須恵器窯の関連は、余草里窯跡群が参考になる。同窯は以前にも指摘したとおり、日本の初現期の「直線型」窯と比較すると、窯体の形態が単純、焼成部の傾斜角度が緩い、焼成部の最大幅が狭い、主軸の床面傾斜が大きな曲線をなさないことが共通点として上げられ、初現期の系譜を考える際の参考になる。おそらく、こうした幅が狭い一群の中のものより小規模なものがモデルになったと推測される。

一方、鎮川地区の窯跡では、崔秉鉉分類のⅢ期群である三龍里90-1号窯以降、窯体の最大幅が2mを越えるものがあり、Ⅲ～Ⅴ群にかけて山水里87-6号窯跡の3.45mを最大として多くの窯が2～3mの幅を有している。しかし、ほとんどの窯は全長8m未満であり、洞張りの特異な形を呈している。少なくともTK73号窯等に直接連なるものとは考えがたいが、小型窯も同時期に含まれている点や、時代的に崔秉鉉のいう3～5世紀代であることを考慮すれば、再考の余地も多少あろう。

鎮川の窯跡群の一群を除くと窯体の幅を広くするものは、鳩林里窯跡群と新龍里窯跡群である。新龍里2号窯は幅3.2m、全長11mでもっと大きく、1号窯が幅3m、全長8.5mを計り、鳩林里窯跡群は約2.5mの幅をもつ。時期的には、新龍里窯跡群が6世紀前半代、鳩林里窯跡群が6世紀から7世紀にかけてであり、鎮川地域に見られたような幅広い形態が、百済地域において系譜的につながるのか否かは不明である。

慶州蒜谷洞窯跡群では、既報告分では21号窯が幅2.1m（全長不明）を越えるが、幅の広い形態は極わずかであり、全長も8mを越えるものなく小型のものが多い。近隣の大邱市慶山玉山洞遺跡での状況は不明であるが、こうした傾向が新羅地方の特徴になる可能性もあろう。

伽耶地域の陵洞1号窯跡も1.5m幅のものであり、余草里窯跡群との関連も考えられるところである。百済地域に比べて幅の広いものを多用しない傾向があるのであろうか。

日本のTK73号窯以降認められる「曲線型」の形態については、これまで見た韓国の諸例では、百済地域の曲線を描いて洞張りのものが多少関連するが、他地域のは相対的に小規模であり、10m以上のものは余草里窯跡群を除いてほとんど存在しない。大型窯は新龍里窯跡群において見られるものの、時期的にはTK73号窯よりは新しく、系譜上に連なる可能性は否定できないものの、5世紀代前半代の状況が不明であるために、こうした系譜の問題は、内的・外的要因の両者を候補としてあげつつ、今少し保留しておかねばならない。

小稿で示したでは、「直線型」と「曲線型」の二種は、地域と数量的な違いはあるが、日韓

窯跡を検討する場合の一つの指標となる。いずれにしても、両国の調査例が増加してくれば、より具体的な検討が可能になってくるし、地域・時期的な設定をさらに進めて、比較・検討がなされると考えられる。そして、生産遺跡に包括される様々な検討課題や諸問題についても比較が可能になると考えられる。小稿はその前段階として、資料の収集と基礎整理を行い、研究の方向性と課題を提示するものである。

付記 小稿は2001(平成13)年度奈良大学研究助成(研究課題:「日韓古代窯跡の資料集成と比較研究」)の成果の一部である。助成をいただいた大学当局に感謝申し上げます。
尚、日本の窯跡資料の文献は、植野1993、1999a、1999bを参照のこと。

<引用文献>

- 李相俊 1998「蘇谷洞土器窯の類型と構造的特徴」【年報】8別冊 国立慶州文化財研究所
李相俊 2000「生産考古学の研究成果と課題-三国時代窯を中心として-」【考古学の新しい指向】釜山福泉洞博物館
李相俊 2001「慶州蘇谷洞遺跡の調査成果と課題」【韓・日古代窯跡研究 成果と展望】国立慶州文化財研究所・窯跡研究会
李殿昌 1982「新羅伽耶土器窯址」暎星女子大学校博物館
梨花女子大学博物館 1988「靈岩鳩林里土器窯址発掘調査」
植野浩三 1993「日本における初期須恵器生産の開始と展開」【奈良大学紀要】第21号
植野浩三 1999a「五世紀代から六世前半代における須恵器生産の拡大」【文化財学報】第16集 奈良大学文学部文化財学科
植野浩三 1999b「初期須恵器窯の構造的特徴」【瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集 森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
植野浩三 2002「TK73型式の再評価-高杯の消長を中心にして-」【田辺昭三先生古稀記念論文集】田辺昭三先生古稀記念の会
金正完・權相烈他 1992「昌寧余草里土器窯跡」I 国立晋州博物館
国立慶州文化財研究所 2000「慶州競馬場予定地(A地域)発掘調査(指導委員会および現場説明会資料)」
權相烈 1995「昌寧余草里土器窯跡」II 国立晋州博物館
田中英夫 1999「濁り池須恵器窯址」信太山遺跡調査濁り池窯址班
崔夢龍・他 1988「全南昇州大谷里窯址」【百濟時代の窯址研究】
崔秉鉉 1988「忠北鎮川地域百濟土器窯址群」【百濟時代の窯址研究】
崔秉鉉 1990「鎮川地域土器窯址と原三国時代土器の問題」【昌山金正基博士華甲記念論叢】
全榮來 1988「全北高敞雲谷里・益山新龍里窯址」【百濟時代の窯址研究】
釜山大学校博物館・蔚山大学校博物館1997「金海陵洞遺跡-説明会資料-」
嶺南文化財研究院 2001「現場説明会資料」28

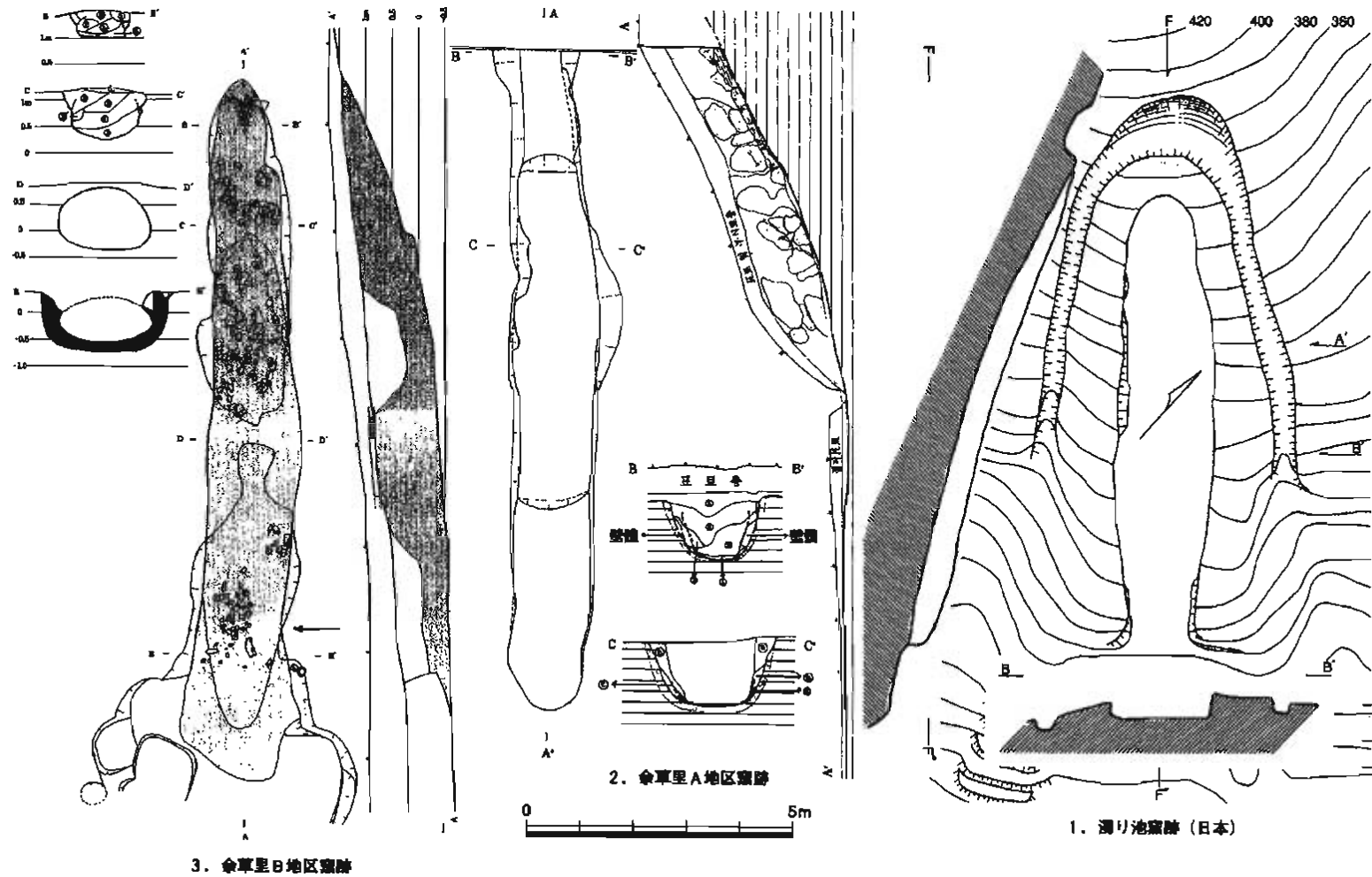


図1 日・韓の線跡 (田中1999、金・権1992、権1995より。一部改変。)

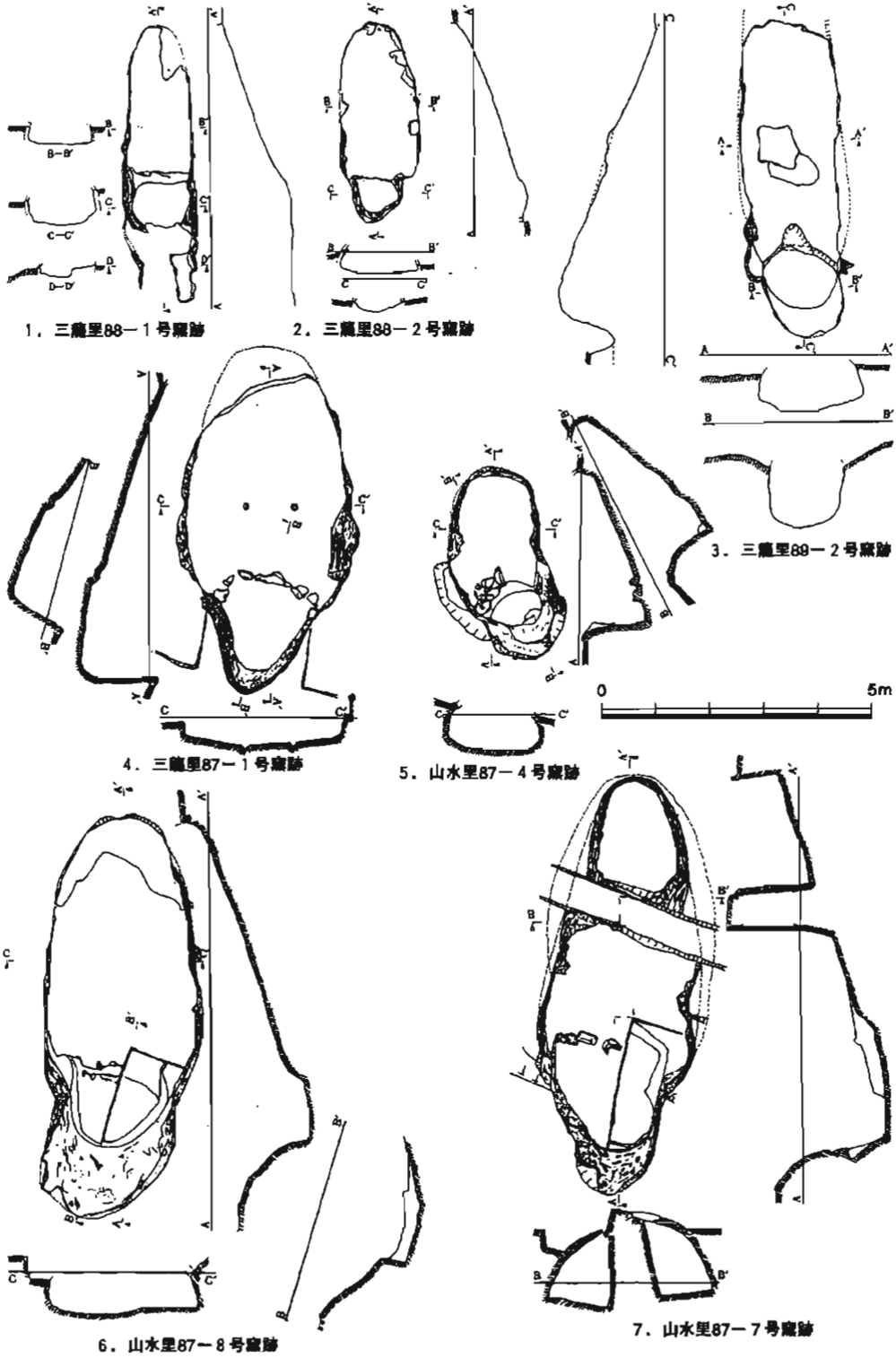


図2 韓国の窟跡1 (崔1990より。一部改変。)

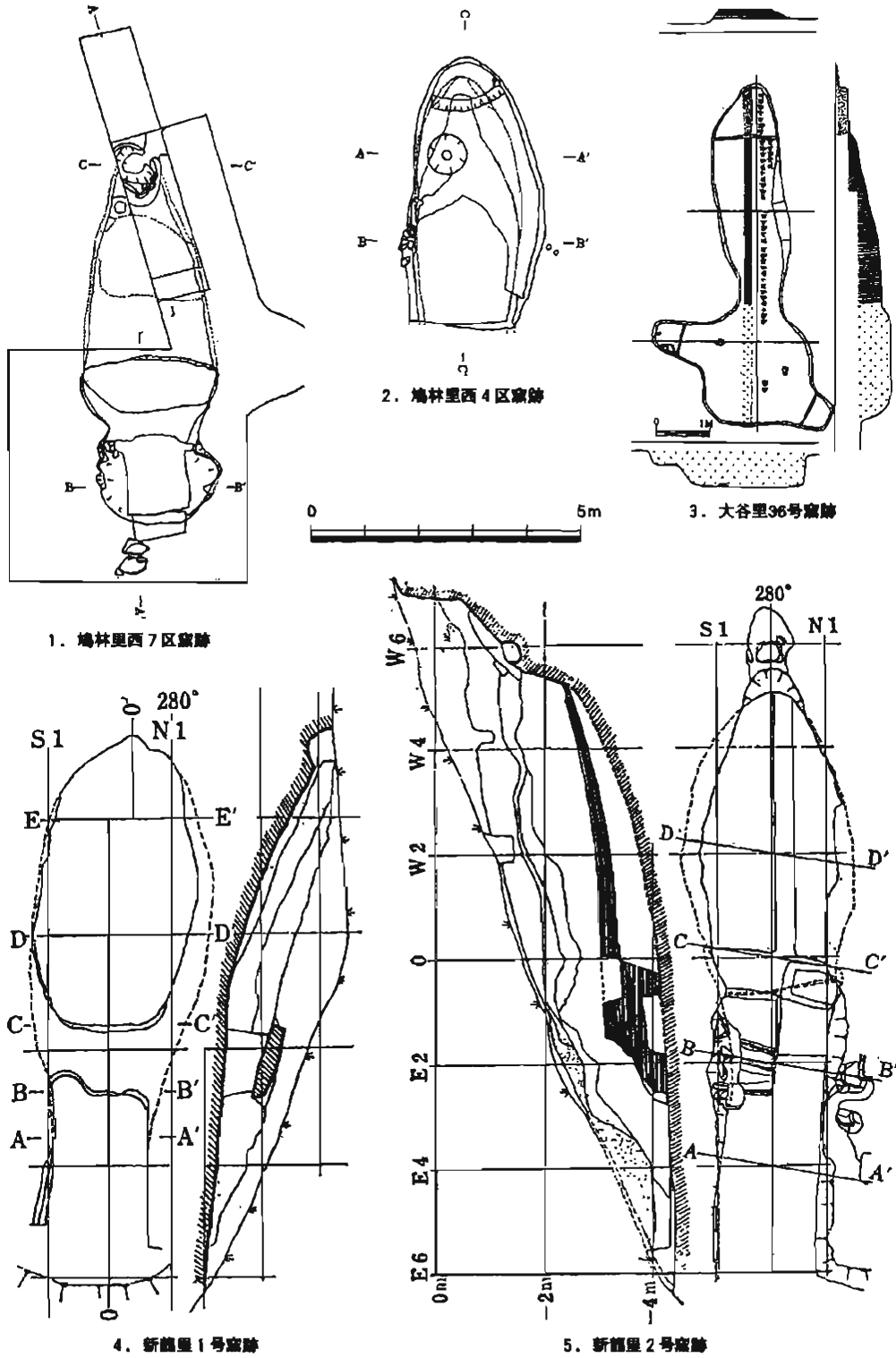


図3 韓国の竈跡2 (崔夢龍・崔秉鉉1988より。一部改変。)

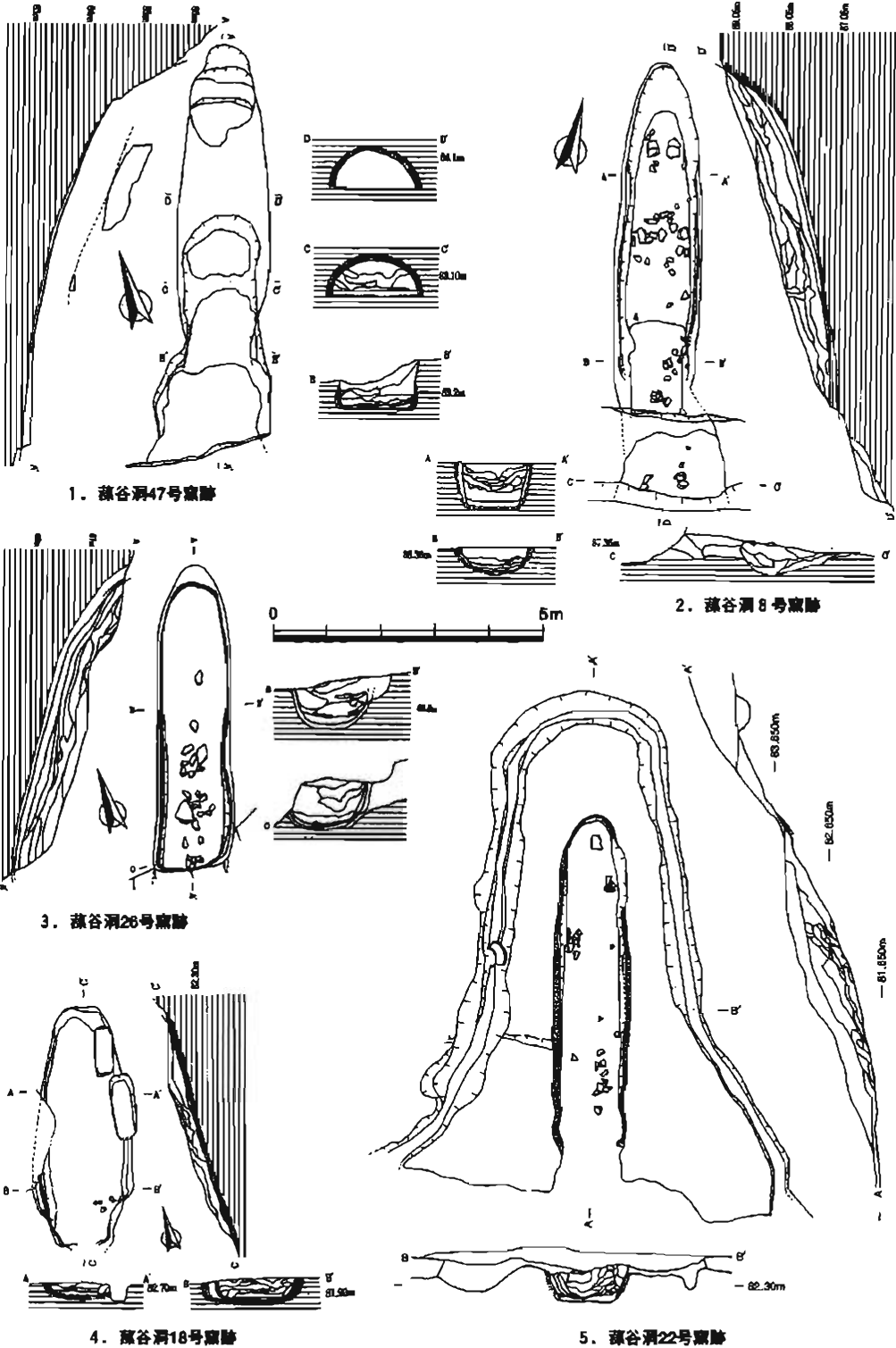


図4 韓国の窟跡3 (李相俊1998、慶州文化財研究所2000より。一部改变。)